

味わい方叢書

文学作品の味わい方

福田清人



明治書院

文学作品の味わい方

福田清人



明治書院

福田 清 人 (ふくだ きよと)

明治37年，長崎県に生まれる。昭和4年，
東京大学文学部国文学科卒業。日本文芸家
協会理事，児童文芸家協会理事長。立教大
学教授を経て，現在，実践女子大学で近代
文学を担当。

著書—近代文学研究書に『研友社の文学運
動』『近代日本の文学史』『国木田独歩』
『写生文派の研究』『福田清人著作集』(全
3巻)等。他に，児童文学関係書等多数。

味わい方叢書 文学作品の味わい方 880円

昭和50年1月15日 印刷

© 1975 K. Fukuda

昭和50年1月20日 発行

著 者 福 田 清 人

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹 彰

印刷者 株式会社 柳沢印刷所

代表者 柳沢一郎

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町1の16 郵便番号 101
電話(03)294-5336(代) 振替口座 東京 4991

0393-24610-8305

徳住製本

は し が き

日本文学の鑑賞——味わい方は、その文学のジャンルによっても、鑑賞者の方法によっても、多種多様である。この本は、その中の一つとして提示したものである。

すなわち私の関心を持つ幾つかの主要な作品から、その作者は同時代に生きた人間を、どのように眺め、捕えてその作品に表現したか、それを通して作者は、人間をどう理解したかと探ってみたのである。むしろ、日本文学に描かれた人間観、その変遷といった方がいいかも知れない。この文学に描かれた人間観を、古典から近代まで眺めたものである。

文学における作者の人間観は、作中の人物を如何に描いたかによって、うかがい知ることができ。主人公その他主要な登場人物の性格、人間描写ということが大きく作用する。作品中の人間の造型、創造は創作行為の中で基本的なものであり、作品の中心をなす作者の思想をも、それにせおわせている場合が多い。

その表現技術によってわれわれの想像の世界に実在する人物と思わせるように、真実にせまる造型をしていることが作品の価値となっている。

人間觀察、その研究において、一般的に言えば生理学は人間を肉体として捕え、心理学は人間をその意識、精神面より捕える。社会学は共同体的な存在者として人間を受けとる。つまり、これ等は理性を多く費して人間を受けとり、觀察するが、作家は理性と共に感性を働かして人間を受けとっているといえよう。

ところが、人間には男性、女性の性別があり、幼児、少年少女、青年、中年、老年の年齢別があり、独身者、既婚者の別もある。

これに職業別、都市、農村、漁村、山村等の居住地別、階級別等、極めて單純に分けてもこうした区別の事情によって、その人間性に影響を受ける。また遺伝、教養、経験、自然と環境、その他多くの事情によって深く人間性に影響をしみとおらせるものがある。

これ等の人間探究に、作家の傾向によってそれぞれの方法があり、また同じ作家でも時と共に変化が見出されるのは、作家の精神の發達と共に当然である。

人間性の根源には永劫不變なものがあるとは信じたいが、社会の変遷によって新しい人間像を形成する要素が発生することも疑いない。日本においても明治以後の近代化が新しい人間像を生じ、それを作家たちは敏感に受けとめ、それを解明し、その作品に造型している。

ところで作家のこうした人間描写、性格描写について、その方法をルネ・ウエレック、オウスチン・ワオーレン共著『文学の理論』（太田三郎訳）によれば次のように説明している。

(1) 最も簡単な方法は名前をつけること。命名ということは、一種の生命を付与する、精霊化する、個性化する。

(2) スコットのような古い作家では、主要人物を一人一人その身体つきを細かく描写する文節と、道徳的及び心理的特性を分析する別の文節で紹介する。ある習癖、ジェスチュア、言葉づかいを用いさせる。

(3) 性格描写と性格学との関連を用いる。たとえばブロンドの髪は家庭的、落ちついているし、ブルネットは情熱的、神秘的、魅惑的を示す。

(4) ある人の家庭はその人の延長であり、その人の家を描けば、その人を描いている。以上であるが、こうした性格を表現するには形式的な描写では成功しないのである。

それには一般的に、直接的方法と間接的方法とがある。前者は、作者がその人物の言行を客観的に観察し、描写し、これに批評を加えることであり、後者はその人物の言葉、行為そのもので性格を示し、他人の批評を加えることである。

ここには、風采、作の進行中に起こる、ディテールに対して、その人物の対決、反応の仕方、心理描写が加わる。

こういうことで、その人物の人間像が明瞭に浮かび上がれば、それこそ作者の人間探求の決算であり、とりも直さず、その人間論がうかがわれることとなる。

ここでフランスの作家フランソア・モーリアックの『小説論』の冒頭の言葉を引いておこう。

「小説家はあらゆる人間のうちで最も神に似ている。彼は神の模倣者である。彼は生きた人間を創造し、運命を工夫し、事件や災厄を織り成し、それ等を交錯させ、終局へと導く。それは架空の人物に過ぎないだろうか？ 恐らくそうであろう。しかし『戦争と平和』のロストフや『カラマゾフ兄弟』は生身のいかなる人間にも劣らぬ實在性を持っている。彼らの不滅の本質は、我々の本質と同様に形而上の信念ではない。現に我々はその証人である。これ等の人物は生命が躍動して、世々我々の間に伝えられている。」（川口篤訳）

これこそ、すぐれた作家によって創作された作品中に厳然と生きている人間の存在を、明示したものである。

福田 清人

目次

はしがき

序にかえて——日本文学の鑑賞について

13

古典文学に見る人間像

「古事記」に現れた上代人の人間性

23

本論の目標

23

上代の人間

26

上代人の創造力と男性対女性

男女の闘争

女性の愛情

上代人と野心

37

権力欲の悲劇

不倫な人間関係への批判

肉身間のそねみと

人間性

上代天皇の残虐行為

上代人の労働生活 46

文化の発達と階級分化 今に通ずる労働性

「万葉集」に見る人間の姿 52

「万葉集」の歌 52

奈良朝人の大合唱

「万葉集」に見る人間愛 54

憶良の人間愛 貧窮問答の歌 貧しさを知る暖かさ

恋歌に見る人間性 59

女流歌人の恋歌 中年の恋の歌 下級官吏の絶唱

民衆の哀歌 66

東歌に見る農民像 67

暮らしの歌 恋歌 夫婦の情愛歌

守備兵の姿 73

徴集兵の悲しみ 徴集兵の望郷の歌 妻のなげきの歌

「源氏物語」の女性群像

王朝を反映した傑作

..... 81

女性論中の女性像

..... 84

さまざまな女性の型

..... 86

空蟬と夕顔

風変わりな未摘花

不運な葵の上

理想の女性

紫の上

理性的な明石の上

運命的な玉鬘

悲恋の浮舟

「源氏物語」に反映した庶民生活

..... 102

平安朝の女流作家たち

107

「更級日記」の作者

..... 107

夢見る乙女

現実の悲哀

女流文学者の群れ

..... 113

清少納言と藤原兼家の妻

情熱に生きた和泉式部

理知の女性

..... 119

科学少女「虫めづる姫君」

機知に富む恋のやりとり

「今昔物語」の庶民像

大説話集「今昔物語」

貧しき女性 農夫の姿 狩人の姿 商人の姿

社会不安と庶民たち

貧困と盗賊

「十六夜日記」の母性愛

実子と継子

一筋の母性愛

旅行く姿

鎌倉暮らし

「平家物語」の人間像

武士と文学

平家の人々

暴君清盛 平家群像

124 124 133 137 137 140 141 146 151 151 153

武人氣質の源氏	159
野性的な木曾義仲	
果敢な武將、義経	
冷徹すぎた頼朝	
「狂言記」の人間群像	168
社会諷刺の喜劇	168
のびゆく庶民精神	170
芸の力	173
都会人といなか者	176
西鶴文学に見る人間像	178
西鶴文学の背景	178
西鶴の描く五人の女性像	180
お夏	
おせん	
おさん	
お七	
おまん	
西鶴による近世の町人	186
商人魂	
長者になる方法	
「日本永代蔵」の人間像	191

近代文学の青春群像

明治前期の文学の青春像

坪内逍遙の「当世書生気質」

197

「小説神髓」の人間描写論
の書生群像

「当世書生気質」の意図

明治前期

森鷗外の「雁」

215

個性的な岡田

「舞姫」の太田

二葉亭四迷の「浮雲」

224

内海文三の性格

現代的なお勢と本田

明治十年代の青年像

明治中期の文学の青春像

島崎藤村の「桜の実の熟する時」

235

新時代の開始を告げる雑誌群
像

「桜の実の熟する時」の中の青春

島崎藤村の「春」

245

「春」の中の青年像

恋愛の謳歌

宗教への傾斜

徳富蘆花の「黒い眼と茶色の眼」	256
二葉亭四迷の「平凡」	260
尾崎紅葉の「金色夜叉」	265
明治後期の文学の青春像	274
小栗風葉の「青春」	274
「春の巻」のあらすじ	
「青春」と「うき草」との関係	
「夏 の巻」の展開	
「秋の巻」のあらすじ	
「青春」の人間像の評価	

序にかえて——日本文学の鑑賞について

すぐれた文学作品は、その作者が真剣に生きて、人生・社会などの真実を凝視し、美を捕え、理想を追求したはての創造体である。したがって、こうした作品にじゅうぶん触れ得た人々は、自己の人生を豊かにし、美しく正しく生きるすべをも与えられるであろう。また文学は、その生まれた社会の鏡の作用も持つので、そこから長い歴史の中の各時代相や人々の生き方を、何よりも具体的に知ることができる。その意味で、日本文学は、わが民族の自画像の系列の相貌も示している。

こうした文学の意義と価値を知るとき、われわれは単なる娯楽・消閑の具と見るような錯覚を消して、深く文学を鑑賞したり、研究したい望みを起こすにちがいない。さらにその上に立って批評を試みたり、創作への希望や実践を志向する者もあるであろう。こうした場合、われわれは、いかなる方法で研究の鋏を入れ、また鑑賞すべきであろうか。

われわれが対象とする日本文学と言っても、非常に広い範囲にわたるが、まず直接に触れるのは、一つ一つの作品の場合が多いのだから、それから例をとって行こう。

第一に、鑑賞・批評の前の基礎作業がなくてはならない。それは、接するその作品が、正確に作者の表現をそのまま記載している原典により、それを正確に印刷したものであるかどうかを調査することである。

まだ印刷術の発明されなかった古い時代の作品は、作者の原稿か、またはそれを写し取ったもの、すなわち写本について読むよりほかに方法がなかった。この写本は書写する際、ときに誤写や脱漏を生じたり、本文の不明な部分が、書写する人の解釈によっては、作者の原稿と異なる文字でしるされる場合もあった。またこういう本は、時間とともに損傷を受けることもある。あるいは「更級日記」に見た好例のように、とじ誤りがあつて、錯乱する場合もあった。すなわち、大正十三年、玉井幸助氏によつて帝室御物の定家自筆本が調査され、古来の錯簡がとじ誤りによることが判明したときものである。こういうことから、古典にはいろいろの異本を生じつつ後世に伝わつてきて、そのまま印刷されたものがあるので、これらの本を比較考査して、原典へ近づける本文批評の基礎作業があるのである。

近代文学の場合は、印刷術の発明・進歩に伴つて、だいたい正確に作者の原稿を印刷し普及しているので、古典に比して、この種の問題は少ない。しかし近代では、一般に原稿を新聞・雑誌に発表し、次いで単行本にまとめる習慣があり、この際、校正などの誤りがないとはかぎらぬ。さらに別の版に組み換える際、編纂の都合などで本文に省略が生じたものもあるし、島崎藤村の「破戒」や高浜